

ロールシャッハ・テスト反応におよぼす 検査者の影響に関する研究(Ⅱ)

—検査者の性・検査態度の影響—

上 田 順 一

問 題

検査状況も一つの人間関係的状况である。今かりに同じ検査材料が繰り返して同じ対象に与えられたとしても、そのときどきの検査状況を構成している被験者—検査者の具体的な人間関係は決して一様ではない。またその際の被験者と検査者とが同一の組合せであっても両者間の関係は常に一定であるとはいえないのが普通である。このように検査状況を一つの人間関係的状况とみるならば、ある検査に示された被験者の応答は、検査材料という刺激とともに検査者という人間的刺激をも加えた複合的の刺激に対する反応とみなさなければならぬ。ある検査者からは貧乏な反応しか示さなかった被験者が別の検査者からは極めて豊富な反応を示すことはしばしば観察されることであるが、この例などは検査状況における被験者—検査者の人間関係の親疎にもとづいてあらわれたものといふべきものであろう。似た例は検査の信頼性を検討する際の手続の中にも見出すことができる。この場合、検査の繰返しによってひきおこされる検査結果の変動は、検査そのものも信頼性にも依存しようが、検査の実施にあたった検査者の変化によって生ずることも否定できない。すなわち、これらの検査結果の変動はそのときどきの被験者—検査者の人間関係の差異にもとづくものと考えられる。

このように検査者が検査結果に重大な影響をもたらすことは、臨床家なら誰しもが等しく強調して止まぬところである。そのために身近にある検査手引書は必ずといってよい程、被験者との親和感、被験者に対する親切・寛容・

激励など検査者のとるべき態度についてふれている。しかしこれらの検査態度の強調はあくまでも一般的な強調であり、要請の域を出ないのであり、その点で実証的裏付けを欠ぐものといわざるを得ない。この意味からも検査者の影響の問題はテスト臨床上重要な位置をもつものと考えられる。

筆者はさきの論文(19)において、従前の関連する諸研究(1,2,5,6,8,9)を概観したあと、Gibbyらの先駆的な研究(3,4)に反省を加えて行った実験結果を報告したことがあった。今回の報告では、その後行ったいくつかの実験結果(16,17,18,20,21,22,23)を整理して、検査者の影響の問題を検査者の性と検査態度の面から明らかにしようとした。また一つの試みとして、被験者を「テスト不安」でラベルした場合の検査者の影響もあわせてみようとした。

研 究 方 法

児童の実験 I

検査者 心理学専攻の男子学生の中から、「明朗快活・積極的・外向的」な性格でしかも人から好感をよせられているもの(検査者A)と、「陰うつ・消極的・内向的」であまり人から好感をよせられないもの(検査者B)の二人を選んだ。

被験児 知能普通・学業中位・性格行動正常の6年生男子4人、女子4人を抽出した。これらの児童は過去においてロールシャッハ・テストを受験したことはなかった。

検査態度 検査者Aはつぎに示す好感的態度で、また検査者Bは非好感的態度で検査に臨んだ。

Table 1 検査態度

<p>好感的態度：暖かい・やさしい・親しみのある態度</p> <ol style="list-style-type: none"> 1. にこにこした態度……笑顔を見せる。 2. 受容的態度……児童の反応に対してうなづく。「そうですね」という。 3. 適度の激励……「よくできましたね」「がんばってやりましょう」「まだありませんか」のこぼさげを入れる。 4. 顔を見る……なごやかな・やさしいまなざしで相手の顔を見る。 5. 検査前に親和感をつくるための会話をする。…「何をして遊ぶのが好き？」その他日常の話題について会話し、児童の気分をほぐすようにする。 6. 応待を親切にする。 <p>非好感的態度：冷やかな・無愛想な・親しみのない態度。ただし常識を越えない程度。</p> <ol style="list-style-type: none"> 1. 笑いをもらさない。 2. 無関心な態度……最少限の質問に答える程度。 3. やや反撥的態度……「さあやりなさい」「それでいいでしょう」。 4. 相手の顔を見ない……知らん顔・そっぽを向く。 5. 検査前の会話はしない……入室したら直ぐ教示を始める。 6. 応待は事務的にする。

検査手続 各被験児は検査者A(好感的態度)・検査者B(非好感的態度)から交互に1回ずつ検査を受けた。その際、検査回数による影響を防ぐ目的で、第1回目・第2回目受験の被験児数が検査者によって偏しないよう注意した。

結果の処理 各被験児から前後2回にわたって得たロールシャッハ反応はKlopfers法(7)に準じて記号化し、数量化した。ついで反応実数は基礎的評定カテゴリー(basic scoring categories)について整理し、好感的態度による反応数と非好感的態度による反応数との差をt検定(両検定)によって検討した。

児童の実験 II

検査者 実験Iが男子検査者であったのに対して実験IIでは女子検査者2人(好感型C, 非好感型D)が選ばれた。これら2人の検査者間

にみられる性格のちがいは男子の検査者A, Bほど顕著なものではなかったもので、検査態度の面で極力差異を示すよう特に指導した。

被験児 抽出方式は実験Iに従い、知能・学業・性格行動の面で普通・正常の6年生児童男子11人, 女子8人を対象とした。

検査態度・検査手続・結果の処理 実験Iと同じく、また以後の実験についても同様である。

児童の実験 III

この実験は検査者の影響を児童のもつテスト不安(test anxiety)との関係から明らかにしようとしたものであり、その点で被験者のラベルに一つの新しい方法を提供するものと考えられる。

テスト不安尺度 Sarason, I. G. (12)の作製した16項目からなる質問紙を用いた。被験児を含む6年生90人に実施し(範囲1—12, 平均6.24, 標準偏差2.06), 高不安群6人(9—12), 低不安群6人(1—3)を抽出した。これら2群間の平均不安得点には $p < .001$ で有意な差が認められた。

幼児の実験 I および II

さきの児童の実験I, II, IIIでは小学校6年生の児童を対象とした。幼児の実験I, IIではいづれも幼稚園2年保育年長組の幼児を対象としてロールシャッハ・テストを実施した。

検査者・検査態度 幼児の実験Iでは児童の実験で用いた男子検査者AとBが、実験IIでは女子検査者CとDとが検査の実施にあたった。このように同一の検査者が異なる対象群を繰返して検査するとき、検査者の影響はより明確にされるであろう。

検査場面での検査者の検査態度はさきに示した(Table 1)と同じやり方で、検査者A, Cは好感的態度で、また検査者B, Dは非好感的態度で検査の実施にあたった。

被験児・検査手続 被験児は知能普通・性格行動正常の幼児男子4人, 女子4人を選んだ。実験Iでは各被験児は男子検査者A(好感型)とB(非好感型)とから交互に1回個別に検査

をうけた。また、実験Ⅱでは各被験児は女子検査者C（好感型）とD（非好感型）とから交互に1回、個別に検査をうけた。したがって、幼児の被験児は異なる検査者A, B, C, およびDからそれぞれ1回、合計4回のテストをうけたことになるわけである。

研究方法の要約

実験は児童に対してⅠ, Ⅱ, Ⅲ, 幼児に対してⅠ, Ⅱ, 合計5回おこなわれた。被験児は児童では小学校6年生が、また幼児では幼稚園2年保育年長組の幼児を対象とした。検査者は男女2人ずつから成り、男子検査者Aと女子検査者Cは好感的検査態度で、一方男子検査者Bと女子検査者Dは非好感的検査態度で検査を実施した。検査手続としては、児童は男子検査者AとBから（児童の実験Ⅰ）、また別の児童は女子検査者CとDから（児童の実験Ⅱ）それぞれ検査された。また、幼児は男子検査者A, Bから（幼児の実験Ⅰ）とともに女子検査者CとDからも（幼児の実験Ⅱ）検査された。こうして得られた被験児のロールシャッハ反応は、基礎評定カテゴリーごとに記号化され、数量化されたあと、研究目的にしたがって、検査者の性・検査態度による児童および幼児の反応の変化が検討された。また、被験児をラベルするための一つの試みとして、児童のテスト不安と検査者影響の関係もとり上げられた（児童の実験Ⅲ）。

結 果 と 考 察

1. 男子検査者の影響

男子の好感型検査者Aおよび非好感型検査者Bによってもたらされた児童と幼児の反応はTable 2 に示す通りである。児童の反応では

Table 2 男子検査者A, Bによる児童及び幼児の反応の比較

	児 童 の 反 応				幼 児 の 反 応			
	A	B	t	p	A	B	t	p
R	34.3	26.1	2.889	<.05	45.9	27.2	3.730	<.01
T	1260.1	463.1	5.833	<.01	1211.7	613.5	3.852	<.01
T/R ₁	18.8	15.4	<1		8.7	9.7	<1	
(non-color)T/R ₁	19.8	14.3	2.004	<.10	6.7	9.1	<1	
(color)T/R ₁	19.1	16.6	<1		11.0	10.0	<1	
W	16.0	14.3	2.120	<.10	15.8	10.9	1.518	
D	17.0	10.8	2.310	<.10	27.2	15.4	3.073	<.02
Dd	1.0	1.1	<1		1.4	0.2	<1	
S	2.0	1.3	1.590		2.2	1.0	1.868	
M	2.5	2.7	<1		2.7	2.5	<1	
FM	6.0	5.8	<1		7.6	4.8	1.269	
m	2.3	2.0	<1		2.4	1.4	<1	
K	0	0	<1		0.2	0.2	<1	
FK	1.0	1.8	1.880		0.4	0.3	<1	
F	18.2	11.1	2.940	<.05	26.1	17.0	2.038	<.10
c	10.5	9.5	<1		0.7	0	2.028	<.10
C'	0.6	0.1	1.597		1.2	0.2	3.407	<.02
FC	0.5	0.6	<1		0.9	0.2	3.555	<.02
CF	2.0	1.9	<1		3.4	1.2	3.507	<.02
C	0.2	0	1.004		1.9	0.3	1.524	
H	6.8	5.6	1.528		7.1	4.2	2.821	<.05
A	18.0	13.0	2.406	<.05	20.8	13.4	2.630	<.05
Pl	18.5	14.0	1.937	<.10	3.5	1.2	2.257	<.10
Obj	2.3	1.8	1.842		4.3	3.4	1.000	
At	0.7	0.7	<1		0.8	0.2	1.096	
Fire	0.8	0.4	<1		1.0	1.2	<1	
Lands	1.4	1.8	1.672		0.7	0.3	1.200	
Na	1.4	0.9	1.306		2.2	0.9	7.111	<.01
Art	0	0	<1		0.5	0.1	<1	
Arch	0	0	<1		1.4	0.5	3.680	<.02
Mt	0	0	<1		1.0	0.4	1.838	
Exp	0.7	0.8	<1		0.2	0.5	1.037	
		df=7				df=7		

R, T, T/R₁ (non-color), W, D, F, A, Pl に、また 幼児の反応では R, T, D, F, c, C', FC, CF, H, A, Pl, Na, Arch に有意の差が見出された。これら検査態度のちがいでよってもたらされた反応数の変動は、好感的検査態度により増加の方向をとることを示している。すなわち検査者のとる暖かい、励ましの態度が被験児の反応を刺戟して容易ならしめることを物語っている。また、それらの変動カテゴリーを児童と幼児とで比較してみると、まず変動カテゴリーの領域について幼児が圧倒的に多いことでわかる。さらに変動カテゴリーの内容をみると、幼児では c, C', FC, CF にみられるように、情緒的因子の反映が特徴的である。男子検査者の検査態度のちがいは児童の反応にも影響するが幼児の反応に対してはより強力にはたらくものと考えられる。しかし、これらのことが実証さ

れるためには、検査態度の影響を検討していく過程の中で、検査の実施順序による影響は見おとしてはならぬ問題である。この影響の除去については検査手続の中ですでに配慮したところであるが、もう一つの問題は、反応数の変動は果して検査者の検査態度そのものの影響にもとづいてなされるのか、それとも検査者そのものの偶然の変化に依存しているのかの判断についてである。この問題の解決には別の実験が必要であった。そのために、新たな別の検査者によってもたらされる反応との比較をしなければならなかった。検査者Aとおなじく好感的検査態度をとるA', 検査者Bとおなじく非好感的検査態度をとるB' を用意して、別の被験児によりA-A', B-B' 間の影響度を比較した。その結果、それらの間の反応数に変動を生じたカテゴリーは全く見あたらないことがわかった。こ

Table 3 女子検査者C, Dによる児童及び幼児の反応の比較

	児 童 の 反 応				幼 児 の 反 応			
	C	D	t	p	C	D	t	p
R	35.1	37.9	1.034		57.2	47.8	1.192	
W	19.4	18.0	1.579		12.7	11.1	<1	
D	13.3	17.0	1.411		29.8	24.5	2.925	<.05
Dd	2.0	2.4	<1		11.2	10.7	<1	
S	0.4	0.4	<1		2.5	1.8	1.370	
M	3.7	4.8	1.397		2.8	1.5	3.171	<.02
FM	5.3	4.0	1.959		3.7	3.4	<1	
m	1.4	1.8	1.161		0.2	0.8	1.329	
k	0.0	0	<1		0	0	<1	
K	0.2	0.2	<1		0.1	0.2	<1	
FK	0.2	0.5	<1		0.1	0.2	<1	
F	20.8	23.1	1.174		45.4	39.5	<1	
Fc	1.2	0.1	2.845	<.02	0.7	0	2.413	<.10
c	1.1	0.1	3.322	<.01	0.1	0.2	<1	
C'	0.2	0.5	1.836	<.10	0.4	0.2	<1	
FC	0.4	0.8	1.161		0.7	0.5	<1	
CF	0	0.7	3.171	<.01	1.0	1.1	<1	
C	0.0	0.2	1.451		1.4	0	1.886	
H	6.8	8.1	1.590		5.4	5.4	<1	
A	17.8	18.0	<1		29.0	23.1	1.255	
Aobj	0	0.3	2.352	<.05	0	0	<1	
Pl	2.0	1.3	1.004		3.0	2.7	<1	
At	0.1	0	1.451		0	0	<1	
Fire	0.9	0.2	1.735		0	0	<1	
Cloud	0.2	0.1	<1		0	0	<1	
Lands	0.8	0.9	<1		0	0	<1	
Na	1.4	1.6	<1		4.8	3.1	1.981	<.10
Obj	3.0	3.0	1.265		5.4	5.1	<1	
Arch	0.7	0.7	<1		6.8	4.2	<1	
Expl	0.4	1.0	1.384		0	0	<1	
	df=10				df=6			

の結果は、反応数の変動は偶然の検査者の変化によるものでないこと、すなわち検査者の検査態度のちがいでよってもたらされるものであることを支持したと思われる。

2. 女子検査者の影響

Table 3 は女子好感型検査者Cと非好感型検査者Dによってもたらされた児童・幼児の反応を示したものである。

児童の反応では Fc, c, C', CF, 幼児では D, M, Fc, Na に有意差を見出した。ここで注目されることは、幼児では男子検査者による場合とおなじく好感的検査態度によって反応数が大きくなっているのに対して、児童では Fc, cの一部にとどまり、他の C', CF は逆に非好感的検査態度によって増大することである。このことは総反応数 (R) についてもうかがえる傾向で

ある。すなわち、総反応数は幼児では好感的検査態度により増大する傾向がみられるのに対して、児童では逆にやや減小するようにみえる。つぎに注目される女子検査者の特徴は、男子検査者にみられたような幼児に対する強い影響がみられない点である。女子検査者の検査態度は反応の変動カテゴリー数からみてほぼ同数であるので、児童・幼児間に影響の差を認めるわけにはいかない。しかし、変動カテゴリーの内容についてつぶさにみるときは、男子検査者の検査態度が特に幼児の情緒的因子に強く影響したのに対して、女子検査者ではその検査態度は幼児よりむしろ児童の情緒的因子に強く影響していることがうかがわれる。このようにみえてくると、検査態度は同じくても、男子検査者による場合と女子検査者による場合とでは、児童・幼児に

Table 4 検査者の性別による児童及び幼児の反応の比較

	児 童 の 反 応				幼 児 の 反 応			
	男子検査者 (A・B)	女子検査者 (C・D)	t	p	男子検査者 (A・B)	女子検査者 (C・D)	t	p
R	30.3	36.5	15.974	<.001	32.1	53.2	2.101	<.10
W	15.1	18.1	1.209		13.3	11.5	<1	
Dd	13.8	15.2	<1		21.2	27.2	<1	
D	1.0	2.2	1.291		0.8	11.0	3.736	<.01
S	1.4	0.4	<1		1.5	2.2	<1	
M	2.5	4.2	2.124	<.05	2.6	2.2	<1	
FM	5.8	4.6	1.064		6.2	3.5	<1	
m	2.5	1.6	1.578	<.10	1.9	0.5	1.370	
k	0.0	0.0	<1		0	0	<1	
K	0	0.2	<1		0.2	0.2	<1	
FK	1.1	0.4	2.041	<.05	0.3	0.2	<1	
F	14.5	21.9	2.370	<.05	21.5	42.5	2.805	<.02
Fc	1.5	0.7	2.321	<.05	0	0.3	2.187	<.05
c	1.0	0.6	1.134		0.3	0.5	<1	
C'	0.3	0.4	<1		0.7	0.3	<1	
FC	0.5	0.6	<1		0.5	0.6	<1	
CF	1.8	0.3	4.136	<.001	1.7	1.0	1.454	
C	0.1	0.1	<1		1.0	0.2	1.209	
H	5.5	7.4	1.360	<.10	5.7	5.4	<1	
A	15.5	17.9	1.215		17.1	26.0	1.983	<.10
Aobj	0.6	0.1	<1		0	0	<1	
Pl	2.0	1.6	<1		2.4	2.8	<1	
At	0.7	0.0	<1		0	0	<1	
Fire	0.5	0.5	<1		0	0	<1	
Cloud	0	0.2	<1		0	0	<1	
Lands	1.5	0.8	1.341	<.10	0	0	<1	
Na	1.1	1.5	<1		1.5	4.0	3.164	<.01
Obj	2.6	3.0	<1		3.8	5.2	<1	
Arch	0	0.7	<1		1.0	5.5	3.345	<.01
Expl	0.8	0.7	<1		0	0	<1	
	df=36				df=11			

与える影響はおのずから異なってくるといわなければならない。このことは同時に男子検査者、女子検査者のもつそれぞれの固有な特徴とも考えられるし、また男子検査者では検査態度が大きく差異をもって影響するのに対して女子検査者では仮に検査態度を異にしたとしても現実の被験児の接触状況の中ではそれほど大きな差異としてうけとられないことを暗示している。

3. 検査者の性の影響

好感的検査態度といい、また非好感的検査態度といってもそれらは現実の検査場面では必ず検査者の性、すなわち男子の検査者あるいは女子の検査者によって示される態度である。1および2の結果はこの間の事情を如実に示したものと いわなければならない。

Table 4 は男子検査者A, Bおよび女子検査

者C, Dのもたらした児童・幼児の反応を検査態度を無視して、検査者の性によってまとめたものである。

男子検査者・女子検査者間に有意差のあった反応は、児童では R, M, m, FK, F, Fc, CF, H, Lands であり、幼児では R, Dd, F, Fc, A, Na, Arch であった。このように検査者の性差は児童に対しても、また幼児に対しても強いことがうかがわれる。しかし検査者の性の影響は児童・幼児を通じて全く同じであるとはいえない。すなわち、幼児では女子検査者によって多くの反応がもたらされているのに、児童では女子検査者によっても (R, M, F, H), また男子検査者によっても (m, FK, Fc, CF, Lnds) 多くの反応が引きおこされている。総反応数 (R) については幼児・児童ともに女子検査者によって増大するところからみて、児童のうけ

Table 5 検査態度による児童及び幼児の反応の比較

	児童の反応				幼児の反応			
	好感的 (A・C)	非好感的 (B・D)	t	p	好感的 (A・C)	非好感的 (B・D)	t	p
R	34.8	32.9	<1		50.2	35.5	2.852	<.02
W	17.9	16.5	2.568	<.02	14.2	10.9	1.734	
D	14.8	14.4	<1		28.3	20.0	3.227	<.01
Da	1.5	1.8	<1		6.3	5.5	<1	
S	1.0	0.7	1.095		2.2	1.3	2.385	<.05
M	3.2	3.8	1.430		2.7	1.9	1.050	
FM	5.6	4.7	1.255		5.6	4.1	1.326	
m	1.7	1.7	<1		1.0	0.9	<1	
k	0.0	0.0	<1		0	0	<1	
K	0	0	<1		0.1	0.2	<1	
FK	0.4	1.0	2.371	<.05	0.2	0.1	<1	
F	19.6	18.0	<1		35.5	28.0	2.048	<.10
c	1.3	0.7	2.117	<.05	0.3	0	2.058	<.10
c	1.1	0.5	2.881	<.01	0.8	0	2.724	<.02
G'	0.4	0.3	<1		0.7	0.2	2.475	<.05
FG	0.4	0.6	1.076		0.7	0.4	1.555	
GF	0.7	1.2	1.713		2.2	1.2	1.807	<.10
G	0.1	0.1	<1		1.0	0.2	1.319	
H	6.5	6.8	1.575		6.2	4.8	1.942	<.10
A	17.8	15.9	1.450		24.9	7.3	2.978	<.02
Aobj	0.2	0.4	1.721		0	0	<1	
Pl	2.1	1.5	1.933	<.10	3.1	2.0	1.737	
At	0.4	0.3	<1		0	0	<1	
Fire	0.8	0.3	2.159	<.05	0	0	<1	
Cloud	0.1	0.0	<1		0	0	<1	
Lands	1.0	1.2	<1		0	0	<1	
Na	1.4	1.3	<1		3.4	2.0	3.504	<.01
Obj	2.7	2.9	<1		4.8	4.1	1.283	
Arch	0.3	0.3	<1		4.1	3.0	<1	
xpl	0.5	0.9	1.508		0	0	<1	
	df=18				df=11			

る検査者の性の影響はその反応決定因 (determinant) にあるように思われる。すなわち、児童では男子検査者によって内的緊張・葛藤や情緒的不安がうながされるのに対して、女子検査者によっては情緒の安定・統制が反映するのではなかろうか。

4. 検査態度の影響

つぎに、検査者の性を無視して検査者の検査態度 (好感的・非好感的) によってまとめたものが Table 5 である。

検査態度の差によって変動したカテゴリーは児童では W, FK, Fc, c, Pl, Fire であり、幼児では R, D, S, F, Fc, c, C', CF, H, A, Na の多くを数えた。これらの変動カテゴリーをみてわかることは、児童・幼児を通じてどのカテゴリーをとっていても好感的検査態度によって反応数が増大していることである。また、好感的検査態度は幼児に対して一段と強く影響することがわかる。しかも反応内容からみて、その情緒的因子の反映に特徴が認められる。これらの点からみて、検査者の検査態度は幼児にみられるような比較的未熟な人格に強く影響することが予想される。

5. 検査者の影響と被験児の性

これまでにおこなってきた検討は、検査者の側の変動因 (性・検査態度) からなされたものであり、被験者のもつ変動因についてはふれなかった。しかし、児童・幼児という一つの発達の変動因についてとり上げなかったわけではない。むしろ児童・幼児の発達の要因についてはさきに示したように多くの有意義な結果を提供した。今ここでとり上げる変動因は被験児の性についてである。その点これまでの検討では、児童・幼児としてはとり上げながらも、それらの性別にもとづく影響にはふれなかったが、このような被験児のもつ変動因を検討することは今後検査者の影響を研究する上に極めて重要なことと思われる。今一つは被験児のテスト不安との関係において検査者の影響をみようとしたことである。

Table 6-1 は男子検査者・女子検査者別の検査態度のちがいでよる幼児 (男児・女児) の総反応数についてまとめたものである。

さきにみたように (Table 2) 男子検査者の検査態度は幼児全体の総反応数 (R) に有意の差をもたらしたが、男児・女児別にみみると女児において影響の強かったことがわかる。女

Table 6-1 検査者の性別による幼児の総反応数 (R) の比較

	男子検査者					女子検査者				
	A	B	t	df	p	C	D	t	df	p
全 体	45.9	27.2	3.373	6	<.02	57.2	47.8	1.192	6	
男 児	42.3	32.6	1.118	2		75.6	62.3	<1	2	
女 児	48.7	23.2	4.875	3	<.02	43.5	37.0	4.076	3	<.05

Table 6-2 検査者の性・検査態度による幼児の総反応数 (R) の比較

	検査態度					検査者の性				
	好感的 (A・C)	非好感的 (B・D)	t	df	p	男 子 (A・B)	女 子 (C・D)	t	df	p
全 体	50.2	35.5	2.852	11	<.02	32.1	53.2	2.101	11	<.10
男 児	58.7	46.5	<1	3		24.5	80.7	4.166	3	<.02
女 児	46.1	30.1	3.777	7	<.01	36.0	40.2	<1	7	

子検査者の検査態度では、さきの結果 (Table 3) にもみられたように、幼児全体としては有意差がみられなかったが、男児・女児別に分けてみると女児に有意差が認められた。このように男児と女児とではうける影響に差異のあることがわかる。しかも女児は検査者の性にかかわりなく、検査者の検査態度に影響されるものといえと。Table 6-2によってもそのことはうかがえるところである。

つぎに、検査者の性は男児・女児にどのように影響しているだろうか。女児では反応数の有意差がみられないのに男児では検査者の性の影響が認められた。以上の結果から、幼児の総反応数に関しては、男児は検査の性に、女児は検査者の検査態度によって影響され、男児は女子検査者によって、女児は好感的検査態度によってそれぞれ反応数を増大することがわかる。

6. 検査者の影響と児童のテスト不安

さきにものべたように被験児の大きな変動因とみられるものに「テスト不安」がある。テスト不安は検査場面に直面して生ずる独得な異常緊張であり、またそれに伴う行動である。Sarason, I. G. ら (11,12,13,14,15) によれば、テスト不安は検査成績と関係する、低不安群は高不安群に比べて知能検査・学業検査などの成績において優ることを報告している。Sarason の「テスト不安尺度」はテストに関する不安について16項目の質問からなるもので、はい・いいえのいずれかの応答によって不安得点1が与えられることになっている。各個人の不安得点は0から16までの間におかれる。

児童の実験Ⅲによって分類された高不安群・低不安群の各被験児は女子検査者CとDからロールシャッハ・テストをうけた。

Table 7-1は児童のテスト不安と総反応数の関係を示したものである。男児については高不安群・低不安群間に有意な差がみられ、低不安群において総反応数の多いことがわかった。女児では有意の差こそなかったが、男児とは逆に高不安群において総反応数が多くなるように思われる。

Table 7-2は女子検査者の検査態度とテスト

不安との関係を総反応数についてまとめたもの

Table 7-1テスト不安と児童の総反応数 (R)

	高不安群	低不安群	t	df	p
全体	34.9	41.3	1.040	20	
男児	29.4	45.6	2.831	10	<.02
女児	43.0	30.1	1.712	8	

である。検査者の検査態度に影響されたのは高不安群・低不安群ともに男児についてであるが高不安群と低不安群とではうける影響にちがいがみられる。すなわち、高不安群では検査者の

Table 7-2テスト不安と検査態度とによる児童の総反応数 (R)

		好感的 (C)	非好感的 (D)	t	df	p
高不安群	全体	35.6	34.2	<1	4	
	男児	32.6	26.3	7.193	2	<.02
	女児	40.0	46.0	<1	1	
低不安群	全体	34.1	40.9	1.980	5	
	男児	41.0	50.3	14.035	2	<.01
	女児	28.6	31.6	<1	2	

好感的態度によって反応数が増大するのに対して、低不安群ではむしろ逆に非好感的態度によって反応数が増大する。一方女児では有意の差はなかったけれども、高不安群・低不安群とも非好感的態度のもとで反応数を増大するように思われる。こうしてみると、男児と女児とでは検査者の影響を異にするしことがわかる。またこの場合の検査者が女性であったことによって起った一つの傾向であるのかも知れない。さらに今後の検討を待ちたい問題である。

7. 検査者の影響の要約

これまでにおこなってきた男子検査者・女子検査者、検査者の性・検査態度による影響に関する結果を要約したのが Table 8である。有意差のあった変動カテゴリーについて、検査者の影響を児童と幼児とで比較してみると、男子検査者の検査態度の影響が最も大きいといえる。

Table 8 検査者の性・検査態度による変動カテゴリー

	男子検査者		女子検査者		検査態度		検査者の性	
	児童	幼児	児童	幼児	児童	幼児	児童	幼児
R	◎	◎				◎	◎	○
W D Dd S	○ ○	◎		◎	◎	◎ ◎		◎
M FM m k K FK F Fc c C FC CF C	◎	○ ○ ◎ ◎ ◎	◎ ◎ ◎	◎ ○	◎ ◎ ◎	○ ◎ ◎ ◎	◎ ○ ◎ ◎ ◎	◎ ◎ ◎
A H Aobj Pl At Fire Cloud Lands Na Obj Arch Expl	◎ ○	◎ ◎ ○ ◎	◎	○	○ ◎	○ ◎ ◎	○ ○ ◎	○ ◎ ◎
有意差 カテゴリー	3 3 0	3 7 2	1 2 2	2 2 0	1 4 1	4 5 2	3 4 2	2 2 3
	6	12	5	4	6	11	9	7

注 ○ 10%水準以下, ◎ 5%水準以下, ◎ 1%水準以下の危険率を示す。

これに対して女子検査者の検査態度は最も小さいといえよう。つまり、児童では男子検査者および女子検査者の検査態度はその影響度において大差のないことを示しているが、幼児にいたって両者の検査態度は大きな差となってあらわれることを物語っているといえよう。幼児から見れば、女子検査者はその検査態度のいかんによらずすべて好感的あるいはそれに近い態度として受けとられているのかも知れない。

男子検査者の検査態度の児童・幼児に対する上の特徴的な影響は、検査態度としてまとめた場合にも児童・幼児間に大きな影響のちがいが

もたらした。

このように検査者の性は児童・幼児を通じてともに大きく影響しているものと考えられる。また全体としては、児童は幼児に比べて検査態度によるよりも検査者の性に影響されやすく、幼児は逆に検査者の性よりも検査態度に大きく影響されるように思われる。

要 約

ロールシャッハ反応に対する検査者の影響を明らかにするために、児童・幼児を対象として男子検査者・女子検査者が検査を実施した。各

被験児によってもたらされたロールシャッハ反応は検査者の性・検査態度の観点から比較検討された。また、被験児の性・テスト不安にもとづく影響の差も検討された。得られた主な結果はつぎの通りである。

1. 男子検査者の検査態度は児童に対しても影響したが、幼児に対してはさらに大きな影響を与えた。特にこの児童・幼児間の影響差は情緒的因子にあるように思われた。
2. 女子検査者による検査態度の影響は児童と幼児との間に男子検査者にみられたような大きな差を示さなかった。しかし、児童に対してはより多くの情緒的影響をもたらしたようであった。
3. 検査者の検査態度は児童にも影響したが幼児に対しては一そう顕著であった。
4. また、検査者の性は児童に対しても、また幼児に対しても可成り強いものであることがわかった。
5. 児童は検査態度によるよりも検査者の性に、幼児は逆に検査者の性によるよりも検査態度によって強く影響されるように思われた。
6. 幼児の総反応数を男児・女児別に比べてみると、男児は検査者の性に、女児は検査態度に影響された。
7. テスト不安に関して児童の男児低不安群では総反応数が多いのに対して、女児では高不安群が多くの総反応数をもたらした。また女子検査者の検査態度は男児の高不安群・低不安群に対して影響したが、両群のうけた影響の方向は全へ対称的であった。

文 献

- 1) Baughman, E. E. 1951 Rorschach scores as a function of examiner difference. *J. Proj. Tech.*
- 2) Cole, D. 1953 Communication and rapport in clinical testing. *J. Consult. Psychol.*, **17**, 135-138
- 3) Gibby, R. G. 1952 Examiner influence on the Rorschach inquiry. *J. Consult., Psychol.*, **16**, 445-449.
- 4) Gibby, R. G., Miller, D. R. & Walker, F. L. 1953 The examiner's influence on the Rorschach protocol. *J. Consult. Psychol.*, **17**, 425-428.

- 5) Goss, A. E. & Brownell, M. H. 1957 Stimulus-response concepts and principles applied to projective test behavior. *J. Personal.*, **25**, 505-523.
- 6) Goss, A. E. & Brownell, M. H. 1957 Stimulus-response analysis of inference from projective test behavior. *J. Personal.*, **25**, 525-538.
- 7) 片口安史 1960 ロールシャッハ・テスト心理診断法詳説 牧書店
- 8) Levy, L. H. 1956 A note on research methodology used in testing for examiner influence in clinical test performance. *J. Consult. Psychol.*, **20**, 286.
- 9) Lord, E. 1950 Experimentally induced variation in Rorschach performance. *Psychol. Monogr.*, Vol. 64, No. 316.
- 10) Masling, J. 1960 The influence of situational and interpersonal variables in projective testing. *Psychol. Bull.*, **57**, 65-85.
- 11) Sarason, I. G. & Minard, J. 1962 Test anxiety, experimental instructions, and the Wechsler Adult Intelligence Scale. *J. educ. Psychol.*, **53**, 299-302.
- 12) Sarason, I. G. & Ganzer, V. J. 1962 Anxiety, reinforcement, and experimental instructions in a free verbalization situation. *J. abnorm. soc. Psychol.*, **65**, 300-307.
- 13) Sarason, I. G. 1962 Individual differences, situational variables, and personality research. *J. abnorm. soc. Psychol.*, **65**, 376-380.
- 14) Zweibelson, I. 1956 Test anxiety and intelligence test performance. *J. Consult. Psychol.*, **20**, 479-481.
- 15) Waite, R., Sarason, S. B., Lighthall, F. F. & Davidson, K. B. 1958 A study of anxiety and learning in children. *J. abnorm. soc. Psychol.*, **57**, 267-270.
- 16) 上田順一 1961 ロールシャッハ・テスト反応におよぼす検査者の影響に関する研究(1) 第18回中国四国心理学会講演抄録, 75-77.
- 17) 上田順一 1962 ロールシャッハ・テスト反応におよぼす検査者の影響に関する研究(2) 日本心理学会第26回大会発表論文集, 340.
- 18) 上田順一 1962 ロールシャッハ・テスト反応におよぼす検査者の影響に関する研究(3) 第19回中

国四国心理学会講演抄録, 128—129.

19) 上田順一 1962 ロールシャッハ・テスト反応におよぼす検査者の影響に関する研究 (I) —検査者の好感度と基礎的評定結果との関係—島根大学論集 (教育科学), **11**, 86—92.

20) 上田順一 1963 ロールシャッハ・テスト反応におよぼす検査者の影響に関する研究 (4) 日本心理学会第27回大会発表論文集, 431.

21) 上田順一 1963 ロールシャッハ・テスト反応に

およぼす検査者の影響に関する研究 (5) 第20回中国四国心理学会発表抄録26—27.

22) 上田順一 1964 ロールシャッハ・テスト反応におよぼす検査者の影響に関する研究 (6) 第21回中国四国心理学会発表抄録, 8—9.

23) 上田順一 1964 ロールシャッハ・テスト反応におよぼす検査者の影響に関する研究 (7) 日本心理学会第28回大会発表論文集, 294.